

わかれ道（樋口一葉）

傘屋の小僧吉三は二親を知らずに生れ、角兵衛獅子の一座で獅子を冠かぶつて歩いてゐたが、足が痛くて歩かれなくなり朋輩ほうばいに置き去りにされた處を、傘屋の先代の女主かみに拾はれ、職人として働いてゐる。年は十六、「一寸法師」と仇名される程小柄だつたが、「火の玉の様な子」だど怖がられる亂暴者でもあつた。それも實は二親を知らぬ心細さ、「慰むる人なき胸ぐるしさの餘り」で、優しくしてくれる人があれば「しがみ附いて、取りついて、離れがたき思ひ」だつたのである。

春の或日、吉三の長屋の裏にお京といふ器量好しの仕立屋が越して来る。近所への附合もよく、吉三にも優しくしてくれるので、やがて吉三は姉の様に慕ふ様になり、或時、こんな事をお京に云ふ。お前の様な人が本當の姉さんだつたらどんなに嬉しいか。「首つ玉へ嚙かじり付いて、その儘往生してもいい。でも、俺が本當は乞食の子なら、もう「可愛がつてはくれないだらうか」。お京は云ふ。親が何であらうが「身一つ出世をしたらばよからう」、意氣地無しを

お云ひでない。

處が、その年の師走の夜、吉三が得意先からの歸り道でお京に遭ふと、お京は流行りの羽織を著て何時に無く好い身形みなりをしてゐる。吉三が不審に思つて問ひ質すと、妾奉公の口が決つて明日引越しをすると云ふ。吉三が驚いて反對すると、お京は云ふ。妾になぞなりたくはないが、「私は洗ひ張に倦きが來て」、こんな「詰らないづくめ」の毎日だから、いつそ樂をしてやらうと思ふのさ。吉三は云ふ、お前ばかりは「妾に出るやうな腸はらわたの腐つたのではない」と信じてゐたのに、「姉さん同様に思つて居たが口惜くちをしい」、もうお前には會はないよ。「そんな愛想づかしは醋ひどからう」としてお京が吉三を後ろから羽交はがひ絞めにする。そんなら妾になるのは止めにするかと吉三が振返る。それは出來ないとお京が云ふと、吉三は「涙の目に見つめて」云ふ、「お京さん、後生だから此肩こゝの手を放してお呉くんなさい」。

「しがみ附いて、取りついて、離れがたき思ひ」の吉三の、この最後の切ない臺詞は實に効果的である。幸田露伴は「たけくらべ」を評して、凡庸な作家ならば「千萬語を費して而も愈々いよいよ其傳へんと欲するところのものと相遠ざかるの醜を演ずる」とは異り、「僅々の文字を以て」作中人物の心中の「消息を傳へしは感ずるに餘りあり」と激賞した。それは「わかれ道」につ

いても云へる事で、他にも例へば、未だ春の時分に吉三がお京に、お前は元が「立派な人」だったのだから「上等の運が馬車に乗つて」迎へに来るさ、でも「お妾に成ると言ふ謎では無いぜ」、悪く取らないでおくれと云ふと、お京は「馬車の代りに火の車でも来る」だらうさ、自分にも「随分胸の燃える事があるからね」と云つて吉三の顔をじつと見詰めるのである。

見事な伏線であつて、元は「立派な人」といふのだから、お京は士族の出でもあつたのだらうが、一葉自身も誇り高い士族の娘だったから、貧窮と辛勞しんろうの生活の中で「随分胸の燃える」思ひをした。一葉の「文は血や汗や涙の化けた」ものだど露伴の云つた所以だが、さういふ一葉自身の生々しい胸奥の「消息を傳へる」ものとして、「一葉日記」をぜひ薦めたい。「人は神聖なるものを多く有してゐる丈だけ、弱點が多い。苦痛が多い。犬的な人に逢つては叶はない」と、森鷗外は「キタ・セクスアリス」に書いたが、「犬的」即ちシニズムに決して陥らず、己が「神聖なるもの」と眞摯に向合ふ二十三四歳の娘の肺腑はいふを絞る名文に讀者は瞠目せざるを得ないであらう。

（「大つごもり／十三夜他五篇」、岩波文庫）